

ハードサスペンス

男撃つ魔群

山本恵三



天山文庫

魔群を撃つ男

著者——山本恵三

発行者——服部将太

発行所——株式会社天山出版

〒113 東京都文京区本郷3-16-6-701

☎ 03(818)0434

☎ 03(818)7275〔営業直通〕

発売所——株式会社大陸書房

〒113 東京都文京区本郷2-3-9

☎ 03(814)7441〔営業〕

郵便振替 東京1-56612

FAX 03(814)5890

印刷——(株)光邦

製本——(株)明光社

乱丁・落丁のものは、小社へ直接お送り下さい。郵送料小社負担にて新本とお取替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

©KEIZO YAMAMOTO 1990

PRINTED IN JAPAN

天山文庫

魔群を撃つ男

山本恵三



TENZAN BUNKO

目次

プロローグ

第一章 餓狼の標的

第二章 二十歳の暗殺者

第三章 甘い尾行者

第四章 狼たちの仮面

第五章 謎の銃弾

第六章 影の標的

第七章 戦慄のスパイ船

第八章 男の死角

第九章 仮面の下

エピローグ

後書 山本恵三

308	304	267	237	189	152	123	99	72	50	18	5
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	---

プロローグ

「おい、お前、沢田英二じゃないか」

振り向くと、白いカッターに雪駄^{せうた}ばきの一^{ひと}眼^めで筋者^{すじもの}と解^{わか}る若者が立っていた。

「……………」

英二は、やくぎに声をかけられるような覚えはなかった。すぐ歩き出そうとした。

「おい、俺を忘れたのか、平島だよ。平島正夫だよ」

男は英二を追い越すと、両手を拡^{ひろ}げて道を塞^{ふさ}ぐようにして立った。

沢田英二は広島市銀山町の郵便局を出たところで、不意に後ろから声をかけられたのだった。七月三十日、ぎらぎらと灼^{しやく}熱^{ねつ}の太陽が照りつけ、それが舗道^{ふどう}に反射し、熱い釜の中に入れられたような暑さだった。英二は九月五日、可部温泉で開かれる同窓会の趣意書を、封書にして各同窓生に出したところだった。広島の中^{ちゅう}学^{がく}を卒業して五年経っていた。英二たちの同窓会は、毎年夏の終わりに開かれた。東京や大阪の大学に進学している者もいた。彼等は毎年同窓会をすませてから自分たちの大学へ帰って行った。

英二は高校までしか出ていなかった。高校は広島^{ひろしま}の工業高校で、卒業するとすぐ日本を代表する広島^{ひろしま}の自動車メーカー太陽工業に入社した。小学生のとき父を亡くして、病身の母と姉と

の三人暮らした。姉は芸州医科大学附属病院で看護婦をしていた。これからその姉と、近くの喫茶店で待ち合わせして食事を奢^{おご}って貰う約束だった。

「おお、平島か。どうしたんだ、その格好は」

英二はやつと眼の前の男のことを思い出した。中学校の同級生だった。名前は平島正夫。卒業以来、住所が解らず毎年の同窓会にも出席していなかった。中学時代は、それほど目立たず、成績も中の下といったところだった。ただ、欠席の多いことだけが英二の印象に残っていた。「俺は山越会系の光栄会の正式な組員になったんだ。それもつい先刻だ。ほら銀バッジを貰ったばかりだよ。記念にここの写真館で写真を撮^とったんだ。——そうだ、お前と一緒に撮れば良かったな。もう一度撮り直すか」

平島は、今にも英二の手を引いて写真館へ引き返しそうになった。

「俺はいいよ。それよりお前、今度の同窓会に出席してくれないか」

「同窓会、ああ毎年やってんだってな。する、する、出席するよ。何たって今度は俺も正式な組員になったんだから威張^{おご}って行けるよ」

そう言くと、平島は白いカッターシャツの襟に光っている銀のバッジに息を吹きかけて大事そうに磨いた。

「ここじゃ何だから、どこか喫茶店でも入るか」

平島は^{あた}辺りを見回した。

「俺はいいよ。それより、この封筒に同窓会の趣旨が書いてあるから後^{あと}で読んでくれ。悪いが、

俺はこの先の喫茶店で姉と待ち合わせしているんだ」

英二は一刻も早く平島の傍から離れたかった。傍を通り過ぎる人たちは、誰も英二たちを真正面に見ようとしなかった。やくざに善良な少年がからまれているぐらいに思っているのかもしれない。そう思ったにしても、誰も介入する者はいなかった。係わり合いになるのを恐れているのだ。

「それを早く言えばいいんだよ。何も遠慮することないよ。姉さんも一緒に俺が奢ってやるよ。さ、行こうぜ」

平島はそう言うのと、自分から先に歩き出し、従いて来いというように英二に首を振った。

「あら、お友だちと一緒になの」

姉のくるみは、英二と平島の姿を目ざとく見つけると腰を浮かして迎えた。

「ヒエーッ、英二の姉さんて凄え美人だな。俺が組の幹部に紹介してやろうか。何たって俺たちの世界じゃ大物になる幹部の姉さんは美人でないといけないんだ。こんな凄え美人なら、どんな大幹部の姐さんになつたって恥ずかしくないぜ」

平島はくるみを臆面もなく見詰めながら言った。

「この方、誰なの英ちゃん」

くるみは周りの客に気兼ねするように辺りを見回した。平島が一眼見て驚いたのも無理はなかった。くるみの美しさは、一際眼を引いた。卵型の顔立ちは英二とよく似ていたが、色が際立って白かった。それも単に白いだけでなく、奥にほんのりと紅をさしたような感じである。

黒く澄んだつぶらな瞳。ちよつと上を向き加減だが形の良い鼻。誠実と清純さを形にして表わしたような感じの良い唇。――眼を合わせただけで相手を心が洗われるような爽やかな気分にした。

「俺の中学時代の同級生で平島というんだ。偶然、その郵便局の前で逢ったんだ」

「俺、光栄会の正式組員になったんで、記念に写真を撮りに行つてたんです。正式の組員といえど会社でいえば係長ぐらいのところで、角力取りなら十両つてところかな。俺等の世界は一生懸命つとめさえすれば、学歴や家柄に関係なく昇進できるからな」

平島は誇らし氣に銀バッジを磨き続けた。

「しかし、危ないだろ」

英二は、平島の身を案ずるように言つた。

「それは仕方ないさ。何か事が起こったときには、軀を張れるようでなきゃやくぎにはなれないよ。ま、だから誰でもやくぎになれるというもんじゃない。それよりお前、何を飲む。姉さんも好きな物を何でもごちそうしますよ」

平島は年に似合わぬ鰐皮の財布をテーブルの上に勢いよく置いた。一万円札が五、六枚覗いていた。英二とくるみは言葉もなく顔を見合わせた。

「おい、沢田君、電話だぞ」

仕事を終え、風呂場で軀の汚れを落としてロッカーで着替えをしていた英二は夜勤の男に呼

ばれて電話に出た。

「もしもし、沢田ですけど」

「おう英二か。光栄会の平島だ」

英二は思わず電話口で顔を顰めた。仕事場までやくざの友だちから電話がかかってきたことに、気が重くなった。

「おい、この間貫った同窓会の趣意書読んだぜ。今夜会費を払うよ。だからちよつと逢いたいんだ」

「会費なら、わざわざ持ってきてくれなくとも書留で送ってくればいいんだよ。宛名が書いてあっただろ」

「それはそうだけど。あの趣意書に同窓生の住所と電話番号が書いてあったろ。俺もやつと一人前の男になれて、無性に誰か友だちに電話したくなつたんだよ。まあ、普通のサラリーマンみたいなことをやってみたかつたんだ。しかし、いざ電話しようと思うとお前より他に逢ってくれるような奴はいねえもんな。英二ならこの間逢つたばっかしで相手が解つてるし」

不意に英二は、平島の孤独が電話を通じて感じられた。正式な組員になつたと言つて、天下を取つたように威勢のよかつた平島の、別の一面を見たような思いだった。英二は逢う約束をした。

広島で暴力団の抗争事件が起きたとき、会社で警察から暴力団について講義を受けたことがあった。やくざの世界に飛びこんで行く少年たちは、そのほとんどが性格的に何か弱さを持つ

ており、その弱さを隠すために暴力団員になるということだった。心の奥にはいつも何か満たされぬ屈折したものがくすぶっていて、仕事や勉強も手につかず、街をうろつく。そうしているうちにチンピラの集団に入り、何かという^{うっせき}鬱積している気持ちが発散させるために喧嘩をする。その喧嘩でたまたま派手な活躍をしたりすると暴力団の幹部に認められ組員に誘われる。組に入ればぱりつとした背広も貰え、食う心配もなくなる。そのうえ、憧れのバツジが貰える。バツジこそやくざの世界のライセンスである。初めて胸にバツジが輝くと得意満面、肩で風を切って街を我がもの顔に歩く。やくざ意識に生命^{いのち}の充実感を覚え、恐いものなしになる。こんなとき組の幹部の声がかかり、「一肌脱げ、男を上げろ」と、暗殺の指令を受ければ、殺される相手の命の貴さなど全く頭になく、ただピストルの引金^{ひきかね}を引くことに男の総てを賭ける。ほとんどの若いやくざは組の幹部にとっては一旦事が起きたときの消耗品でしかない。親分の単なる指先の代行即ち鉄砲玉として青春の総てを燃焼してしまうのだ。

また、やくざになるような者はもの事を冷静に観察することはできない。何かあるとすぐカーツと頭にくるような人である。喧嘩のときでも、女とセックスするときでも、頭に血が上ったようにエネルギーの総てを集中して爆発させる。やくざが或る種の女にもてるのも、このためである。だから、チンピラややくざに声をかけられても絶対に相手にするな。

警察官の話は大体そういう事だった。

「悪かったな、わざわざ呼び出したりして」

英二が待ち合わせに指定した行きつけの喫茶店へ行くと、すでに平島は来ていた。今日は白

い夏の背広をきちんと着ている。その背広の襟には、例の銀バッジが相変わらずさん然と光っていた。

「会費、先に払っておくよ」

そう言うとき平島は、手の切れるような一万円札を出した。

「会費は三千円だよ。俺、今、釣り銭がないから後で貰うよ」

「なーに、これ全部取ってくれよ。会費を払った残りは、俺からって言って皆に酒でも買って出してくれよ」

「そうか悪いな」

「いいってことよ。それより、今夜、俺とつき合えよ、ちよつと顔の利きく店があるんだ」

「そうもしておれないんだ。母が病氣なんで早く帰ってやらないといけないんだ」

英二は平島を同窓会に誘ったことを後悔していた。彼が出席することで、同窓会の雰囲気が減茶苦茶になるのではないかと心配だった。どう考えても彼の出席は場違いであった。

「そうか。それは残念だな。近々大きな仕事をやることになって、たんまり入ったのにな」

平島は英二の言葉を意外にあっさり信用した。

「親兄弟は大事にするんだぜ。お互い、肉親の縁には薄いようだからな。ま、今夜の分、同窓会で盛大にやろうぜ」

如何にも話が解ったように平島は背広の裾を開いて腹をどんと打った。膨らんだ胴巻きに黒光りのするものが見えた。ピストルをぶちこんでいた。

「あつ！」

英二は思わず息を呑んで平島を見あげた。平島はそのとき、ドアを押して入って来た三人連れの男を見て顔色を変えた。三人連れは入り口の傍の角の席に坐った。

「英二。俺、急に大きな仕事をやることになったんで先に失礼するぜ」

平島は、そう言うのと、胴巻きのピストルを抜き取り、つかつかと、三人の男のほうへ歩いて行つた。

「山田組の大島やな」

平島は真ん中の男に念を押すように訊いた。

「そうやが、お前はなんじゃ」

両側の二人の男がさつと身構えて立つたときは平島のピストルが火を噴いていた。

「畜生！ 山越会の者やな」

大島は怒鳴りながら脇腹を押さえてテーブルと椅子の間に倒れこんだ。

「野郎、よくも親分をやつたな」

二人の男が平島に同時に飛びかかった。平島はそれを一瞬の差でよけると、ピストルをぶら下げたまま猛烈な勢いで店の外へ走り出して行つた。

「逃がすな、殺るんだ」

二人の男も転がるように外へ走り出した。英二は、それを自分の席から遠い世界の出来事のように呆然と突つ立つたまま見ていた。

広島市内の国鉄横川駅から北へ向かつて、太田川沿いに加計と広島を結ぶローカル線の可部線が走っている。そのほぼ中央に可部という小さな駅がある。この駅から北へ三キロほど入った所に、通称「可部温泉」と呼ばれている鄙びた温泉町がある。四、五軒ほどの温泉旅館が点在しているだけで、近隣の農家の人たちの湯治場になっている。

九月五日、夕刻――。

一番街外れにある松屋旅館は、広島市N中学校の同窓生約二十五人の団体客で賑わっていた。九月の声を聞いたとはいえ、まだ残暑が厳しく、温泉町は閑散としていた。英二は朝起きたときから、今日の同窓会に平島が出席するかどうか気になっていた。喫茶店のピストル発射事件は、翌日の新聞に大きく掲載された。平島の射った弾丸は千多会の幹部で山田組組長の右脇腹を貫通していた。病院へ運ばれたが出血多量で死亡したと出ていた。その記事を見た瞬間、英二は眼の前が真っ暗になったような気がした。それまでもまるで自分が誤ってピストルを射ったような気持ちになっていただけに、相手が死んだと解ったとき、自分が殺人犯になったような思いだった。

それだけではなかった。喫茶店発砲事件の解説に、――事件の少し前に犯人は同年輩の男性とコーヒーを飲んでおり、犯行の打ち合わせをした形跡がある――とも書いてあった。英二は自分が平島と同じ暴力団員と見られていることを知り愕然となった。喫茶店にはよく出入りをしており、千多会の者が、平島と一緒にいた自分のことを訊きに来て、英二の身許を割り出し

た暴力団が、自分の所へも因縁をつけて来るのではないかと夜も眠れなかった。それどころか英二が太陽工業の社員であることを知って、会社へ因縁をつけに来るのではないかと恐れた。もし、殺人を犯した暴力団員と喫茶店で逢っていたことが知れたら、即刻会社を蹴になるのは間違いない。しかし、千多会の連中は喫茶店へ英二のことを訊きに行かなかったのか、何も言つてこなかった。

残る心配は平島が警察に逮捕されることだ。警察に逮捕されれば、英二のことを話すのは解つていた。そうなれば、会社にも千多会にも英二が平島とつき合つていたことが露れてしまう。英二は、平島が警察の追及を逃げることが出来たなら、彼と交際するのを一切止めようと決心した。しかし、英二の危惧を嘲笑うように、平島は同窓会が始まる午後四時より十分ほど前に会場に姿を現わした。

「よう、この前は迷惑をかけたな」

そう言うとき英二を廊下の隅に連れていった。

「あのときのこと、絶対に誰にも言わんとけや」

平島は釘を刺すように言つた。

「それは大丈夫だけど、しかし、君はこんな所へのこのこ出かけて来てもええんか。警察やこの間の連中が探してると違うのか」

「構わん、構わん。大勢の中にいればかえつて奴等の目をくらますようなもんだ。まさかこの俺が中学時代の同窓会に出てるなんて誰も考えやせんよ。警察は別としてそれほど連中はここ

が良かないもんな」

平島は頭を指でさして言った。自分もそのやくざの一員であることを忘れていたようだった。「よう、天宮、元気にやっとなつたか」

平島は突然、玄関へ入って来た同窓生の姿を見つけると、まるで自分が幹事でもしているようにオーバーなゼスチュアで近づいて行った。

四時には同窓生の全員が集まり、すぐ酒宴に入った。六時に宴会が終わった。会が終わると二人、三人と連れだって温泉へ入りだした。帰る前に汗を流して、さっぱりしたかったのだろう。英二は平島が風呂へ行くのを待っていた。風呂場で二人だけになったら、交際を中止するようどうしても申し入れるつもりだった。しかし、平島は一向にその気配を見せなかった。

「おい、平島、風呂へ行かんか」

ついに英二は自分から誘った。

「おう、そうするか。今日の同窓会は全く楽しかったな。来年からは、また必ず出席するから連絡してくれや」

英二と平島は、部屋の隅に畳んであったタオルと浴衣を持って風呂場へ向かった。風呂場は別棟になっていた。中国山脈の山裾にある可部は、すでに太陽が山の端にかかり、あた辺りは茜あかね色に染まっていた。さすがに日暮れとともに山の冷氣が流れこんできてふっと身の引き締まるような涼しさを感じた。英二は庭の敷石に立って深呼吸した。遠くの山裾をも靄が静かに流れている。